

画面をタップして
俺にイタズラしないで

読みし試

俺が今、はまっているのは魔法少女の育成ゲーム。

プレイヤーは魔法少女をスカウトして導く魔法の世界の妖精。タイプの女の子を選んで、訓練や修行をさせ、戦闘では指示やアドバイスをし、お節介にプライベートのサポートもする。

魔法少女を強くするには戦闘も重要だが、十八禁のエロゲーとしての醍醐味は、精神が不安定にならないよう、処置をすること。

女の子たちは、それぞれ理由や目的があって、魔法少女として悪に立

ちむかっているが、どうしても鬱憤をためこんでしまう。

「ほかの子は、青春を謳歌したり、恋愛をタノシんだり、夢を追いかけたり、輝いているのに、どうしても、わたしは、だれにも知られず褒められることなく、一人血を流してウスヨゴれて泣いているんだらう・・・！」と。

不平不満が募って限界がくると、闇落ちして悪の組織にとりこまれてしまうに、たまにストレス発散をさせないと。

妖精から床上手のイケメンに変身し、濃密に愛しあって心安らかにさせるのだ。

スマホゲームにして、その手法は、寝そべる魔法少女、画面越しにその体を指でタップするという。

指の動かし方で「撫でる」「舐める」「揉む」など細かい種類の愛撫ができるし「服を脱がせる」「下着を脱がせる」の基本の操作プラス、課金して「言葉責め」「大人のおもちゃを使う」「緊縛する」「鞭を打つ」など特殊プレイも可。

おまけに、だ。

戦闘に負けたら負けたで、敵側になって凌辱ができるし、闇落ちしたならしたで、妖精の愛のパワーで救いだす、究極のエッチイベントが発生するし。

ゲームの内容やシステムは、そう目新しくないが、魔法少女のキャラデザと、画面をタップするときのリアクションと喘ぎが大変、気に入って、仕事と食事をする以外は、ほぼスマホを覗きっぱなし。

彼女がいるとはいえ、ゲームにはまってからは音信不通。そりゃあ、不審がられて、家に押しかけられたもので。

浮気を疑ったらしいものを、俺の心が奪われているのが、よその女ではなく、CGの女の子だと知り、ほっと一息。は、してはくれず。

「こんなの女性差別よ！」と金切り声をあげて、奪いとったスマホを窓の外に放った。
レアなオシオキプレイ中だったから、おじやんにされて、俺はブチ切れ。

「ジェンダーフリーを主張するのはかまわんが、無害な人の趣味まで規制するんじゃないやねえよ！」

「はっ！そんなに女性の気もちが分からないってんなら、あんたも、画面の向こうの少女のように、ケダモノな男の食い物にされてみればいいんだわ！」

意識高い系のヒステリックな捨て台詞を吐かれて、彼女とは、それきりお別れ。

もちろん、スマホ代は弁償してくれず。

俺も画面を指で連打して、同じように、おっぱいをつついたものだが、もちろん、されるのは初めて。

このごろ、自慰しかしてなかったからか。

見えないとはいえ、ヌクモリのある手で乳首をイタズラされて「ひゃあ！あう、ひ、あ、ああ、やあ、ああう！」と腰をびくんびくん。

加えて、ほかの指でもタップして、耳をしゃぶったり、頬をちゅちゅしたり、首を舐めたり、肩を噛んだり。

熟練のゲーマーなのか、小賢しい指づかいをしゃがって、ああーんとまんまとその手の中に。

「は、はあ、はあん、や、やあ、だめ、そんな、同時に・・・」と膝をくつつけて、太ももをすりすりしていたら、強制開脚。

股間の情けないさまを、きつと画面越しにご満悦に眺めながら、妖精のイケボを降らしてきて。

「あれ？しばらく忙しくてナオニーをしていなかったのかな？

ためこんだのが膨らみに膨らんで、半ズボンがきつそうだね、かわいそうに・・・。

ん？もしかして、おしっこを漏らしちゃった？染みがどんどん広がっていくよ」

「甘やかしモード」のわりに、笑いをこらえているようだし、いちいち物言いが引つかかるんだけど！？

心のなかでクレームしながらも「おしっこ漏らした」と指摘されれば、

恥ずかしいし聞き捨てならない。

「ち、ちが・・・！おしっこ、じゃ、これは・・・！」と訂正しようとするも『これは』なに？」と含み笑い。

乗せられて、口を滑らせそうになったのに気づき、頬を熱くして、だんまり。

「おお、おお、そんなに泣いてかわいそうに、わたしが存分に慰めてやる」

泣かせた張本人のくせに、いけしやあしやあと哀れんで、ちんこに集中攻撃。

どれだけの指がタップしているのやら。

にぎにぎ、しこしこ、揉み揉み、れろれろ、しゃぶしゃぶ、じゅぽじゅぽ、ちゅぶちゅぶ、ちんこを隙間なく、ぬるぬる触手が覆いつくし蠢いて。

「や、やあ、やにやああああ！」と早くも射精したとはいえ、胸も股間も変わらぬ勢いでタップ&スライドされつづけ、さらなる触手も投入。

耳の穴をじゅぷじゅぷ、首や肩をにゅちよにゅちよ、わきをこちよこちよ、へそをちゅぽちゅぽ、腕や足をねろねろ、指先をにゅちにゅち。

おまけに尻の奥にも、何本も触手がもぐりこみ、ぶちゅぶちゅぬこぬ

こ！拡張工事を性急に。

ゲームでは、小指を除く八本の指にしか、画面は反応しないのに。多数の野郎たちが、肩を並べてスマホ越しに、ヨガル俺をげへげへ見下ろしながら、指をタップしているというのか。

想像すれば、屈辱に苛まれて舌を噛み切りたくなるも、体は熱と心拍数をあげあげで、ヨロコブばかり。

身と心が引き裂かれるようなツラさに「ああ、やあ、やだあ、た、タケ、タケトお、助け、てえ！」と泣き叫べば、冷笑が降ってくる。

ツンデレ美形シヨタは
お呼びじゃありません



営業の外回り中、車の事故に巻きこまれ死んだはずの俺は、また会社のデスクに座っていた。

どうやら、熱心にプレイしていたBLゲーム「男だらけの会社で社内恋愛は禁止です！」に転生したらしい。

とはいえ、あらたな人生を歩むことになったのは、主人公でなければ、攻略する主要キャラでもなく、顔が描かれていないモブCとして。

一応、主人公の同期で親しい友人の一人なのだが……。

俺が転生してからも、名前がもらえず「モブC」と呼ばれる始末。

なんて、空気のような雑魚キャラになったのを嘆いてはいない。

B Lの世界では壁や観葉植物になりたいと願う腐男子にとって、主要キャラから距離をおき、じっくりリーマンの秘密の恋愛模様を観察できるのは本望。

おまけに、ゲームと同じく、俺には心の声が聞こえるし。

たとえば、主人公の新入社員テツペイと、指導係の先輩がこんな、やりとりをしていた場合。

「おい、テツペイ、だいじょうぶが？」

「なんだか、ふらついているし、顔が赤いし、目がうつろだし」

「あ、いや、昨日、ちよつと、筋トレしすぎて・・・」

当たり前さわりのない先輩後輩の会話のようで、心の声はというと。

「今日は忙しいって分かってたのに、テッペイがあまりにエッチで、抑えがきかなかつたな・・・。」

ああ、今も、目を潤ませて、熱っぽい視線をむけやがって・・・仕事
中だが、ちよつと、お触りだけでも・・・。」

「先輩のバカっ。自分のせいって分かかって聞いてきやがって。
ぼくにへタな嘘を吐かせて、ほんと、イジワル。」

もお、そんな、エロイ目で体をまさぐるように見られたら、ぼく、ぼ
く、ガマン、できなく・・・。」

「すこし静かなところで休もうか」と先輩がうながし「は、はい、す

みません・・・」と部署からでていく二人を「ゴチソウさま、どうか、ごゆつくり」と崇めるように見送る俺。

ちなみに、この「指導係の先輩×新入社員テツペイ」が俺の推しカプ。ほかにも、目白押しのイケメンがテツペイの争奪戦をしているものの、今のところ、テツペイは先輩一筋。

おかげで、恋愛禁止の社内であって、二人が心の声でいちやいちやするのを、毎日聞けて至福。

たまに人気のない倉庫や会議室から、あんあん漏れるのを耳にすれば、ほかの人にばれないよう助力しつつ、ドアや壁に張りついて、ご相伴にあずかり。

こうして、真面目に仕事をこなしながら、推しカプを見守り隊の活動

に勤しんで、充実した日々を送っていたのが、頭痛の種が一つだけ。

主要キャラの一人、シヨタツンデレの吉太郎が、ハラスメント的にならうとおしくからんでくること。

吉太郎の名にそぐわない、金髪で青い瞳をした、絵に描いたような美少年。

そのくせ、俺より年上の二十八才のいい大人で、社長の息子。

現実にはありえない、名前からしてギャップのあるシヨタ風成人にして、典型的な性根の腐ったお坊ちやま。

が、デレたときのギャップ萌えに心奪られるプレイヤーは多く、主要キャラの一二を争う人気。

いや、俺はふだんからチクニーしていないし、前世でエッチしたときも、自分のを触らず、相手にも触らせなかった。ただ、転生してから、ナオニーを一回もせず、たまりにたまっていたものだから。

根っからの腐男子なれど、現実では無個性な異性愛者。

BLゲームに転生し、同性愛に興味を持つようになったものの、自分が当事者となるのは、なかなかタメラワレて。

前世では、がんがんオカズにしていたのが、BL世界においては、どうにも、ちんこがしおしお。

で、いざ、ムリヤリ当事者にさせられたなら、乳首を触られただけで、

元氣満点に即勃起、だらだらお漏らし。

よほど、ためこんでいたからか、もともと、素質があつたのか。

なににしろ、美少年に冷ややかに見おろされながら、大人のおもちやでイタズラされて「やだあ、こんなキモチーの、生まれてはじめてえ！」と恥ずかしげもなく、体が大ヨロココビ。

あつという間に追いつめられ「や、やあ、やあん、や、やめ、てえ！ああ、だめえ、吉太郎・・・！」とつい呼び捨てにし、イキそうになつたところ。

「ぶふっ」と嘔きだし、非情にも、スイッチオフにしやがって。



男だらけの会社で

社内恋愛は禁止です！

駅で彼女とケンカして、突きとばされ、線路内に落ちかけた直後、電車がきて即死。

目覚めたのは、よりによって、その彼女がプレイしていたBLゲーム「男ばかりの会社で社内恋愛は禁止です！」だった。

そう、この彼女が一癖も二癖もあつて。ラブラブだったとき、なぜか、プレイするのを隣に座って見せられたのだ。

そのころは、彼女にぞっこんだったので、請われるまま、十八禁のエッチシーンまで鑑賞。

まあ、おかげで、ゲームには詳しい。

題名のとおり、この会社には「社内恋愛禁止」という謎の規則がある。BLの世界ならではのフザケタルールであり、一応、理由としては、先代の社長が、男のハニートラップにかかって、イタイ目にあっただかららしい。

とって、BLの世界にあって、男がたむろする会社で、なにも起こらないわけがない。

ゲームでは（彼女がビッチなプレイをしていたから）主人公のテッペイが、TPOもへったくれもなく、主要イケメンキャラと社内であハンウフンやりまくり。

ただ、転生したこの世界では、テツペイは指導係の先輩一筋の揺るぎなき両想い。

あまりに、つけいる隙がないからか、主要キャラは、ほかの男の争奪戦をおっぱじめる事態に。

そのターゲットになったのが、まさかの、テツペイの友人の一人にして、モブBの俺。

なんと、転生して半日で、飢えた獣たちに狙われていると気づく間もなく、食い散らかされてしまったもので。

倉庫の整理を、主要キャラの犬定（いぬさだ）と、二人きりでしていたとき。

大定は後輩であり、くるくるパーマに、くりくりの瞳、従順で健気。名のとおり、見た目も性格も犬のように愛らしく、ゲーム中では、たまにテンションがあがると、三角耳とふさふさ尻尾を生やしていた。癖が強い主要キャラのなかで、比較的、平凡であり無害そうに思えたから、すっかり油断をして。

転生したばかりで、頭を混乱させていたし、変に肩に力をいれていたからか。
まだ二十代というのに、重いものを持ちあげたとき、生まれて初めてのぎっくり腰。

抱えるダンボールを落とすし、柵を手でつかみ硬直。
すこし体を揺らすだけで、激痛が走る予感がし、息をつめて身動きが

できず。

段ボールの落下の音を聞きつけ「どうしたんですか!？」と駆けつける犬定。

その声も腰にくるようで「じ、じつは、腰をやってしまつて……」とすぐに白状。

抱きつきそうな勢いだったのが、急ブレーキを踏み「え!? あ!? ぼく、どう、すれば……!」とおろおろするのに「今は動けそうにないから、しばらく静かに、ようすを」と。

「おまえは仕事、つづけてるよ」と云おうとして、犬定が俺の背中をじっと見ているのに気づき。

「先輩……」と曰く。

「ズボンのお尻のところ、割れ目に沿って、きれーに破けちゃってます」

そういえば、やけにズボンがきつかったんだよな！

とんでもない状況に陥って呆気にとられながらも、どうにか会社になジモウと励んでいたから、ズボンのことまで気が回らなかった！

コントのようにズボンを破いたこと自体、まあ、男だし、さほど恥ずかしくはなかったが、引つかかるのは、犬定の反応。

腰に響きそうで、顔もかたむけられず、目の端でしか見れないとはいえ、こういうときはスナオに笑うか、先輩に気を使って、フォローをするところ。

どうも、尻を注視したまま口をつぐんでいるようで「なんなんだよ」と聞こうとしたところ「あの、先輩……」とどうしてか声を震わせて。

「べつに先輩の下着にケチをつけるわけじゃないですが、その……Tバックを愛用しているんですね」

せつせと素股する生ちんこが、破れたズボンから覗く肌に、かすめるのに「ふああ……！」とぞくぞくして、尻の奥が疼くような。

B Lの世界の住人になると、漏れなく、こんな狂った体質になるのか！？

だめだめあんあん、ブザマな乱れように、死にたいほどの恥を噛みしめながら、せめて瞼を閉じて、犬の耳を見ないようにしたのが。

股に挟む生ちんこが不穏なウゴキをしたに「ひゃあ、ああ!？」と目を見開く。

腰を引いて、生チンコを退けるかと思いきや、Tバックにもぐりこんできたのだ。

尻の奥まで入りこみ「俺、ワルイ子・・・も、ムリ、はあ、は、ね、先輩・・・？」としおらくお願いしつつ、プードル感はどこへやら、肉食獣のように目をぎらぎら。

「ば、だめ・・・！」と泣き叫ぶもムナシク、Tバックをずらしたまま「生ちんこ、いつきまーす！」とばかり突撃。

手に鞭をびしびし当てて、吠えたてたなら、ぶん！と振りあげて。
乳首をばしり！もう片方の乳首も、ばしり！

ほんらい、激痛が走るはずが「ふひい！あふうん！」と鼻にかかった喘ぎを漏らし、丸見えのちんこを、びんびんにフル勃起。
恥ずかしげもなく、チビツたように、先走りをとろとろと。

熱くて痒い乳首を、鞭の固い先で、ぐりぐりイジメられて「あう、はう、はあん、あん、ああん・・・」と腰をふりふり、お漏らしで股をびちよびちよに。

「おまえのような、悪魔に魅入られるような、よこしまな淫乱を、わたし以外、だれが愛でてやるというのか？
なんだ？わたしより、具合のいいセフレでも見つけたのか？」

「ちが、ちが、い、ま・・・！」と首を振るも、鼻で笑われて、いつの間にか持っていた、蠟燭を掲げてみせて。

炎が揺れるそれを、まさかのまさか、ちんこに向かって、かたむけやがった！

溶けた蠟が滴って、ちんこを直撃。

が、火傷を負ったようなイタミはゼロで、その代わりにすさまじい射精感がこみあげ、たまらず「うひひああああー！」と射精、ではなく、空イキ。

B Lの呪いが、俺の体の芯まで染みついていくらしく、そのあとも熱の蠟を垂らされて「ああ、だめえ、だめえん！きもち、よすぎ、て、ふへはにやああああ！」と精液を一滴も漏らさずにイキまくり。

乳首を鞭でイタブラレルのも相まって、無尽蔵に溢れる快感を持って余し、もうコワイほど。

